

最上川河畔から新たな地域創造の期待

最上川河畔に位置する庄内町清川。最上川は山形県の内陸から最上峡の厳しい渓谷を流れ下り、この地で庄内平野に出てようやく水勢を穏やかなものにする。清川の地は古くからの舟運の拠点であった。ここには様々な人々や物資が行き交うことで形成されてきた周囲の農村集落とは決定的に異なる歴史文化と人情が育まれている。

筆者が6年間暮らした内陸北部のとある山村を後にしてこの地に移住したのは、一山村では解決しえない様々な農山漁村の課題や一山村だけでは実現しない農山漁村の可能性の掘り起こしを、最上川流域の村々の人々の具体的な活動を活性化しながらつないで本格的に取り組んでいくためであった。清川は歴史的背景からもその適地であったと言える。

筆者が移り住んだのは2008年12月のことだからそれほど昔のことではないのだが、その後、この清川を軸に様々なことがつながり始めている。人が動くことで様々なことが具体的次元で変わるというのを日々感じる。取り組みの意義を感じさせてくれる清川の最新の状況のいくつかを今回はレポートしてみたい。

◎廃校となった清川小学校の再生

2009年3月地元清川小学校が閉校となった。地区の中心に位置する空き校舎は、地元の地域振興協議会の強い意向のもとで県内の大学や行政と連携して「歴史の里の館（最上川学推進センター）」として同年6月に早くも再活用がスタートした。今では、ふるさと学習や地区住民の交流の場として、活動のための道具や交流ルーム（いずれも手作りのものばかり）を備えた地域の活性化の拠点として運用されようとしている。

◎郷土料理の再生

地元のお母さんたちが郷土料理の研究開発や提供を行うチームを結成した。それまで見過ごされてきた地域の伝統料理を軸としたメニュー開発に取り組み始めている。川漁師が好む「舟だまり鍋」の復活、最上川の川魚類を活用した料理の数々、最上峡周辺の山菜料理など、自分たちで楽しみながら訪れる人たちに提供している。今年に入ってからはカフェ「そよ風食堂」をオープンし、地域住民を会員とした手作りの食堂経営にも取り組み始めた。

◎舟だまり（清川港）の再生

地区の漁業者たちにとって長年懸案であった船着き場（清川港）の再生が本格的に動き始めた。漁業者だけではなく、川に目を向けた活動を続ける地元団体、NPOそして行政が本気で取り組み始めた成果の一つと言える。今年中には住民と関連団体の運営組織や行政のサポート体制も整えられる見込みだ。

◎学生たちや若者達の参画

地域外部の学生や若者たちが清川に集い始めた。大学との連携プログラムはもとよりそれ以外の機会にも数多くの学生たちが歴史の里の館を訪れる。また、周辺地域の若者達も

立ち寄る場として位置付けられつつある。先日は地元の青年たちが情報交換の場として利用し、公民館機能では補完しえない若者達の集いの場を形成しようとしている。

清川は少しずつだが、本来の成り立ちの姿を取り戻しつつある。それは、ひとえに地域にかかわる当事者の人々の日々の努力の写し鏡と言える。先日、最上川の舟下り観光に取り組むある社長さんから含蓄の深い言葉を聞いた。「最上川河畔に生まれた者にとって、最上川に携わる本当に良い仕事を達成するのに必要なこと、それはテクニックや知識ではない。いかにその仕事と地域を好きになれるか、そのことをよその人たちとも共有できるかということなのです。」ここには東北の地域づくりの重要なメッセージが含まれていると思う。